Heroldo de HEL

N-ro22　　januaro, 1988

北海道エスペラント連盟
００４札幌市白石区東札幌２条６丁目
尾田ビル２Ｆ中央オフィス学院気付け

安心して学べる平和な日本と世界を

運動第２世紀の新年にあたって

北海道エスペラント連盟
会長　　三沢　正博

新年あけましておめでとうございます。

今年は干支では戊辰の年にあたり、明治維新からちょうど１２０年になります。この１２０年のうちの三分の一にあたる戦後４０年余り、わが国は少なくとも国際的な戦争をすることなく、平和な歳月を送ってきました。それに先立つ三分の二が戦争に次ぐ戦争の８０年だったことを思うと、この４０年の歳月の長さと尊さを思わないではいられません。

この平和は、だれかが自然と与えてくれたものではありません。アジア諸国と日本の土地で流された膨大な血潮の犠牲の上に、国民の願いと運動が、それをもたらしたことを忘れてはなりません。いや、もっと厳しくいうならば、今日の平和は辛うじて保たれているといって過言ではありません。

エスペランチストは平和主義者です。しかし、エスペラントをやっていれば、世界が平和になると考えるとすれば、これほど安易な夢想はありません。平和な世界だからこそ、エスペラントを学べるのです。運動第２世紀の新年にあたって、安心してエスペラントを学べる平和な日本と世界を作ることを考えたいと思います。次の１００年間にエスペラントが世界的になるかどうか、それは次の１００年間が平和であるかどうかにかかっています。その重さを共感したいと思います。

連盟役員会報告

去る12月12日、札幌市において第51回ＨＥＬ大会後の第１回役員会を開催致しました。　その結果について下記のとおりご報告いたします。

記

☆会議の日時　１２月１２日（土）１４時より

☆会議の場所　ホレンコ事務所

☆協議事項

①第７５回日本エスペラント大会の札幌開催に対するＳＥＳ（札幌エス会）の決定とＨＥＬの対応について

本件についてはＨＥＬの役員会において主催団体として時期尚早との決定をなし、道大会にその旨報告し承認された経緯から、（ＳＥＳとしても対外的には後援を求めないとの決定もあるので）組織としては精神的には後援するが、前決定の変更を求めるＨＥＬの臨時大会または役員会を招集しないと決定した。この結果この件に関連した役員の辞任問題も正式議案としなかった。

（２ｐにつづく）

★札幌エスペラント会第75回日本大会を招致

札幌エス会が今年の日本エスペラント大会の開催を決定した。

１９８８年８月２０・２１日
札幌市北区　自治労会館ほか

（詳報２面）

日本大会開催決定に至る経緯と今後の取組み

札幌エスペラント会　児玉　広夫

数年前、盛岡市の第７１回日本大会を契機に、札幌でも近い将来日本大会を、と取り沙汰されるようになった。若手活動家が次々と姿を消していくという沈滞ムードから漸く立直り始めた頃でもあり、日本大会の招致は、北海道のエス運動盛上がりの大きなバネになるという期待すらあり、当時、だれ一人としてそのことに異論を唱える者はいなかった。事実、札幌を中心としてエスペラント熱は高まり、講習会後も引続き学習や運動に参加する者も増え、なかでも新しいエスペランチストたちのアイデアによるザ祭や北海道大会は、今までにない“若さ”を感じさせるものであった。

そうした明るい展望の開かれるなか、つまり、一昨年暮れあたりから、そろそろ日本大会が話題に上り、軌を一にしてＫＫＫ（日本大会常置委員会）から要請の文書が届き、北海道エスペラント連盟（ＨＥＬ）役員会で協議し、その結果はすでに御承知のとおり「辞退」という決定となったのである。

誤解を恐れつつも、ここで敢えて私見も交え、辞退の理由を述べてみよう。

1．やる気はあっても、やれるのか。それだけの実力が備わっているのか。

2．日本大会の取組みは、ほんとうに運動組織の強化につながるのか。

3．“市民運動として定着するエスペラント運動”を旗印にしてきたことが、逆にブレーキにならないか。

の三点に要約されよう。なかでも、１に関連して、財政赤字が出た場合、引受け団体がすべての責任を負わねばならない、という念の入った断り書きが、ＫＫＫへの反発になったことは否定できない。また、３に関連して、市の国際交流機関や民間の海外交流機関などとやっと接点ができつつあるとき、それに、マスコミも好意的にとりあげつつあるとき、はたして彼等の関心を満たすに足る日本大会になるだろうか、という点などについても否定的な見解が大勢を占め、それらすべてを“時期尚早”という名目で「否」と決したわけである。

昨年９月の北海道Ｅ大会には、ＫＫＫの三人が「札幌開催」に熱い期待を寄せて参加されたが、そこでも、さきの決定を覆すに至らず、翌月の札幌エスペラント会（ＳＥＳ）の臨時総会では、むしろ「否」の再確認をおこなう結果となったのである。そしてその旨をＫＫＫに伝えた後、事態は急変した。吉原正八郎ＳＥＳ会長の再度の呼びかけで、札幌エスペラント会主催の日本大会開催の運びとなったのである。紆余曲折の果てのこうした決定を疑問視する方もおられると思うが、“よ

ただ本件のように二つの組織の決定が相反する場合には事前の協議を慎重にしないと、会員間に不信や不要な動揺を与え、組織の亀裂や運動の停滞をもたらすので、役員は特段の配慮を必要とする旨申し合わせた。

②（ＳＥＳに対して）運転資金としてＨＥＬの積み立て決定した４０万円貸与の件

本件については了承する。

☆出席役員　三沢正博、児玉広夫、宮岸忠孝、高橋要一、星田淳、北畠瞳、宮井康夫、砂野裕子、河原一弥。

（文責：連盟事務局長　宮岸忠孝）

し、やろう！”とわれわれを決意させた吉原会長の心情をこめた次の言葉を是非お汲取りいただきたい。

1．われわれの辞退によって１９８８年の日本大会がぎりぎりまでもつれこむことは、日本のエスペラント運動にとって計り知れないマイナスとなる。

2．対外的にはお粗末な大会とそしられようが、敢えて引受けよう。

3．しかし、道外から参加される方は心をこめてむかえよう。

4．そうすることが、北海道のザメンホフと慕われつつ、昨年６月に逝去された故山賀勇先生のご遺志に添うことになると信じる。

かくして、われわれはついにスタート台に立った。ただ、さきのＨＥＬ役員会の決定とどう調整するかが問題となり、結局、ＨＥＬの決定に至った背景にはそれなりの意義があると認めて（つまり、そこで心配されていた点を充分に配慮しながら）、ＳＥＳ主体の大会をすることで意見の一致を見たのである。

すでに、モバード誌１１月号、レヴオ・オリエンタ１２月号に「札幌開催」が速報され、道外から「連帯と協力」の力強い意思表明が寄せられ、道内の非ＳＥＳ会員からも協力を惜しまない旨の激励が寄せられている。何にもまして私達を安心させてくれたのは、われわれの最も苦手とする大会プログラム関係については、関東、関西のベテランの方々が全面的に協力してくれることだ。

従って、私達は道外から参加されるエスペランチストに満足していただける“札幌らしい”大会にするよう心掛ければ良いのだ。

例えば、開催日と会場を決定した現在では、

○ ホテル・航空券込みの割引きコースについて旅行業者と折衝する

○ 大会記念品としてアイヌ・ユーカラと札幌観光案内のＥ版を発行する

○ 屋外のビール園で大ジンギスカン鍋パーティーを開く

○ 市内高校生による『緑の星の下に』の公演やプロによるエスペラント人形劇を披露し、一般市民にも開かれた場面をつくる

○ お硬い大会行事をよそに、並行して「半日コース市内観光めぐり」や「２日間コースの大会後観光」を企画し、エスペラントを話せなくとも（どちらか）ご夫婦、家族同伴で参加できるようにする

などなど、そしてこれ等の具体化のため、すでに１２名のメンバーで２回にわたり準備会が開かれた。これからは、準備会を全員参加による実行委員会に切り替え、いよいよ本番に向けてスタート・ダッシュしたいと思っている。

どうか、会員諸氏の支援と協力を心からお願いしたい。

Feliĉan novjaron!

北海道エスペラント連盟
会　長　　三沢　正博

外役員一同

Feliĉan novjaron!

Heroldo de HEL
編集長　　高橋　要一

外編集部員一同

第７５回日本エスペラント大会情報
La 75-a Kongreso Japanaj Esperantistoj
Sapporo, 1988-08-20/21

札幌エス会は１０月３１日、ＫＫＫ（日本大会常置委員会）の要請を受けて、第７５回日本大会の開催を決定した。以下、大会準備委員会発行の“La plej nova informo”などから進行状況を紹介する。

☆準備委員会は吉原正八郎・札幌エス会会長を責任者とする１２名で構成されている。ＫＫＫとの連絡は主として児玉広夫があたる。

☆開催日は、札幌の夏にさわやかな風が吹き始める８月２０日（土）、２１日（日）。

☆大会主会場は自治労会館（開羽会式・分科会、北区北６西７）、第二会場としてクリスチャン・センター（分科会、北区北７西６）。両会場は徒歩数分の位置にある。札幌駅からも近い。

☆市内観光、大会後観光、東京・大阪方面からの参加者のためにホテル・航空券の割安セットを用意する。

☆第５２回北海道大会は日本大会中に開催する。

☆記念品として“Ainaj Jukaroj”の改訂を検討する。また、札幌芸術の森リーフレットのＥ版作製に着手する。

（金井朗）

札幌エスペラント会からのお知らせ

第７５回日本エスペラント大会開催にあたって、参加者のみなさまへのサービスの向上と事務負担の軽減のため、ホテルの予約、割引き航空券の販売、大会後観光の申し込みは、日本旅行（株）苫小牧支店に代行していただくことになりました。詳細はあらためてご案内いたしますが、みなさまのご理解とご協力をお願いいたします。

なお当会で用意した宿泊施設（北海道クリスチャン・センター、北区北７条西６丁目）は第二会場でもあり、主会場の自治労会館へもポプラ並木で有名な北海道大学へも、徒歩３分という便利なところにあります。相部屋一泊朝食付で3500円、５０名ほど宿泊可能です。ご希望の方は、往復ハガキで当会までお申し込みください。先着順に申し受けます。

また、大会一日目午後の札幌市内観光、ジンギスカン・パーティー、登別温泉への一泊二日の大会後観光の手配もすすめています。これも、あらためてご案内いたします。

なかなか北海道、札幌を訪れる機会のないみなさまに、さわやかな北海道の夏を楽しんでいただけるような日本大会を、と当会は企画しています。

８月には、ぜひ札幌においでください。心からお待ちしております。

〒００４　札幌市白石区東札幌２条６丁目尾田ビル２Ｆ
中央オフィス学院気付け　　札幌エスペラント会

札幌のザメンホフ祭

札幌エスペラント会のザメンホフ祭が12月12日北区のクリスチャン・センターで開催された。参加者は４１名（他に不在参加５名）で、星田淳・文子、影浦泰子（苫小牧）、須藤昭三（室蘭）、江口音吉（小樽）、佐々木将人（旭川）の札幌E会外の出席もあり道央圏のZ祭として盛況な会合となった。

第１部は渡辺晋道の司会。佐藤なみ子（高校２年）による開会宣言のあと、La Espero 斉唱、吉原正八郎札幌E会会長のあいさつ、三沢正博北海道E連盟会長、小樽の江口氏、WANG Zongsheng氏のあいさつがつづいた。WANG氏は中国ナンキン市の科学院土壌研究所から北海道大学農学部に留学中のE-isto。

木村喜壬治氏は、T.セケリが２７年前に来道した際の講演を引用して、古くて新しい問題としての“会話能力”についてきびしく指摘した。坂本桂子氏の話はワルシャワ大会の思い出とホマラニスモについて（別掲）。

北畠暹氏は秋におこなわれた日中E-isto交流の旅の報告。中国各都市での熱烈な歓迎ぶり、シャンハイの長谷川テル旧居訪問のこと、ペキン大会から１年を経過した中国のE運動の現況など興味深い内容であった。“とにかく若い人たちが熱心に勉強している。借金させてでも札幌の若い人たちをつれて行けばよかった”という話もあった。

夕食後は佐々木司会で gaja vespero 。まず、各紙札幌版のZ祭案内をみて参加した南雲、鈴木の二人の女性が登場した。“中学校の教科書でEを知っていた。これから勉強したい”とのことで一同拍手。宮沢直人は砂沢ビッキの木版画カレンダー“アイヌ・モシリ”を紹介。このカレンダーの月、曜日はイギリス語、E、ひらがなで表記されている。さっそく二人が購入した。

Rondo Pupiloj は“Hamleto ”第３幕第１場を朗読。宮井康夫、渡辺康子、阿部映子、藤平あや子、砂野裕子、馬場恵美子、カワハラ・カズヤが“熱演”した。初級講座の豊蔵正吾、菱浩、金森美子、義村政見、成田敏彦の５人は木村講師とともに“Tilio ”を歌った。大友鞆一氏はマンドリンで“荒城の月”“ともしび”“赤いハンカチ”などを演奏。

意外な出しものは吉原会長の手品だった。次つぎに小道具をとりだし、カード、輪、コイン、水芸を披露して会場に驚きと拍手のうずをまきおこした。最後にカワハラが来年札幌で開催される日本E大会を成功させようと呼びかけたあと“Zuj, zuj, per poto-bato ”を歌った。

記念写真、Tagiĝo斉唱、佐藤みはるの閉会宣言でことしの札幌E会のZ祭は終了した。今回の企画、準備には札幌E会月番の小淵修子、小林貴美子、宮井康夫をはじめとする会員があたり、札幌国際交流プラザにポスターを掲示、チラシをおくなどの宣伝にもつとめた。

＊　　＊

札幌E会のZ祭会場にＪＥＩの図書委託販売とＨＥＬの売店が設けられ、それぞれ48冊（65,235円）、22冊（11,850円）の売り上げがあった。またEl Popola Ĉinio 購読（北畠暹peranto)も受け付けた。　(Kk)

磯部幸子女史逝去

（財）日本エスペラント学会理事長・磯部幸子女史が、１月１５日午後、心不全のため東京医科大学病院で死去、７４歳だった。

磯部女史は８６年の第５０回北海道エスペラント大会に出席され、『E百周年記念事業計画について』と題して講演した。

ザメンホフの理想に魅了されて

札幌　坂本　桂子

何かザメンホフ祭で話すように言われた時、正直なところ全く困りました。私のエスペラントはまだ初級の段階なのです。そんなわけですから、今年の夏はじめて世界エスペラント大会へ参加した時は、本当に心細い状態でした。私が一生懸命おぼえていった言葉は、Kiel vi fartas? と、Estas tre ĝoje vidi vin. という言葉でした。持ち前の好奇心にかられて、参加したのですが、毎日本当に疲れ果て、ホテルに帰ると丸太のようになって寝ていました。

私は偶然に開会式でポーランドの女性と友達となりました。その日、私が会場に着いた時には、すでに式は始まっていました。満員なのできょろきょろしていると、後の方に一つ空席がありました。女の人の隣の席だなと思いながら、勇気を出して、"Ne okupita?" と言いました。そうすると相手は"Libera" と言って座るよう手ぶりで答えました。これがエミーリャと友達になったきっかけです。彼女は学校の先生です。その時からわずかな単語と身ぶりで、彼女と一週間行動を共にすることとなりました。

私たちはワルシャワの旧市街をアイスクリームをなめながら歩きまわりました。エミーリャは私に、戦争のこと、アウシュヴィッツで死んだ自分の父親のことを話してくれました。お互いに戦争を知っている世代であるため、何と云っても第2次大戦中のことが話題になりました。そしてお互いに平和のよさを語り合いました。

大会中の一日、私は友だちとザメンホフのお墓をおとずれました。高いレンガ塀に囲まれたユダヤ人墓地は、夏の陽をあびてひっそりしていました。けれどもザメンホフのお墓の前だけは、人だかりがしていて賑わっていました。ザメンホフのお墓の隣りにクララのお墓があり、その下の方にリディアとソフィアの名がきざまれた金属板がはめこまれていました。私はその時、ザメンホフの伝記で読んだことを思い出していました。

彼が死んだ時、ユダヤ人であると言う理由で、ポーランド国家はあいさつも送らなかったと云うことです。ただ数十人の貧しいユダヤ人と約二十人のエスペランティストが葬儀に参加しただけだったのです。ポーランドの国民詩人ベルモントは彼への弔辞を「ラザル・ザメンホフは亡くなったのではありません。彼は永久に生きているのです……」という言葉で結んでいます。また、ザメンホフは死の直前に「死は消滅を意味しないだろう」と書いています。私がザメンホフのお墓の前で考えたのは、このことでした。彼の肉体は死んだけれど、その高邁な精神はエスペランティストの胸の中に生き続けています。

世界大会で何が一番印象的でしたかと聞かれたならば、それは、あの会場を埋めたたくさんの人びとだったと答えます。いろいろな肌の色、髪の色、眼の色、若い人もいれば、年取った人、中年の人、車椅子の人、杖をついている人と、それぞれ皆違います。これらのたくさんの人びとは、皆ザメンホフのかかげた理想に魅了されて、はるばるやって来たのだと思います。

私がエスペラントを学ぶようになったのは、全く偶然からでした。はじめは単に語学に興味があったからにすぎません。けれども、勉強をすすめていくうちに、どうやらザメンホフの説くホマラニスモの考え方がわかって来たように思います。今日ここにいらっしゃる皆さんも、何らかの形でザメンホフの考えに賛同していらっしゃると思います。そしてここに私たちがザメンホフ祭をひらく理由の一つがあると考えます。

日中エスペラチスト交流の旅参加記

1987.10/25～11/3　上海、青島、済南、泰安、曲阜、北京

苫小牧　　北畠　瞳

昨年の北京での世界大会以来、募っていた想いが、ＵＥＡ東京事務所が企画したこの旅行に参加することで、その一部を実現することが出来た。身辺諸々の事情があったけれども、この機会を逃したら今度はいつ行けるかわからないということもあってのことである。

同行１６名、幸い三沢正博ＨＥＬ会長も加わって、私には随分と気楽な旅ではあったが……以下、日を追って記してみよう。

１０月２５日　上海

午後6時１０分、大阪空港から２時間１０分でもう小雨に煙る上海空港で友人の上海世界語協会事務局長・汪敏豪氏の出迎えを受けて交流の旅はスタートした。さらに、この旅行中、私たち日本側をお世話してくれるために中華全国世界語協会から事務局次長の祝明義氏が加わった。

ホテル到着後、汪氏に伴われて銭敏棋女史が待つ経少英氏宅へ。この夏のＵＥＡアジア協議会以来の再会を喜び合い、思いがけず中国の家庭でのおもてなしと熱い友情を受けて夜半すぎまで語り合った。

１０月２６日　上海

Verda Majoの旧居を訪問。現在の居住者が隅から隅まで開放して見せて下さったのには、ただ驚くばかり。日本ではどうだろうかと考えてみる。“望郷の星”をご覧になった方にはご存知のところ。ここで日本の一女性が想像に絶するような苦労を厭いもせずに平和のために働いたことを思い胸が締め付けられた。

市内観光の後、上海のエスペランチストとの交流学習会。最初に汪敏豪氏から上海エスペラント会の歴史について講義を受ける。現在中国におけるエスペラント界の主要な方たちが上海でエスペラントに関わっていたということも興味深いことであった。その後、小グループに分れて交流。ワルシャワでの顔見知り、施明以女史も加わって、彼女と共通のアメリカの友人の話も出て、世界は狭い！を実感する。

中国側は若者が多く、学習わずか１ヵ月というのに（もっとも、エスペラントの教師養成のためであるが）十分話している。話す機会がないと、北海道に住む私たちと共通の悩みを持っていると云いながら、彼等の積極さにはアゼンとするばかり。“komencanto が多いのですね”とも云われた。夕食後は、かの有名な上海雑技団の見学。中国の曲芸、パンダの曲芸などを楽しんだ。

１０月２７日　青島

上海から青島へ－－－快晴の青島空港では、友人の魏兵氏が大きな緑星旗を持った彼のkursanojを伴って、また北京からの戴頌恩夫妻の顔など、さらにテレビカメラの出迎えを受ける。魏兵氏とは北京大会の折、彼の日本語による文通相手の消息を頼まれて彼女の居所を探し当てて、文通を再開する労を取ったことにより文通を続けており、ＵＥＡ東京事務所がこの旅の企画を発表する前にぜひ旅行団に加わって、彼の青島での活動を見て欲しい、彼のkursanojを激励して欲しいと手紙をもらっていたので、この旅の私個人の一つの目的でもあった。

青島はその歴史から西欧の雰囲気のただよう、

それは美しい街である。午後から市内観光。魏兵氏のkursanojは、青島エスペラント会が中華全国世界語協会の協力を得て進めているテレビ講習会の出演者として、１ヵ月ほど前から彼と寝食を共にして特訓しているという。私のことをkursanojに話してあって、私を待ちこがれていたと云って喜ばせてくれ、盛んに話しかけてくる。観光を楽しむより、私は若い彼らとのオシャベリを楽しんだ。彼らは、最初のころはむずかしくて、また特訓がきびしくて、何度も泣いたのヨ、でも今はエスペラントをして良かった、こうして日本のエスペランチストと直接話すことが出来たのだから、と私とのオシャベリを楽しんでくれた。彼らは16歳から24歳までの男女各３名。学生や小学校の先生、中国国際旅行社青島支社に勤めているということであったし、このうち、１６歳の姜大海少年は三沢会長と楽しそうであった。

夕食後、エスペランチスト同士二組の結婚披露宴に招かれた。今日は特に市当局から許されたということで、爆竹のすさまじい音で新郎新婦を迎えたのも非常に興味深い。彼らもまた、わが友のlernantoj であり、中・エスペラント両語による進行。現代中国の若者らしい宴の中にも中国の伝統も取り入れた披露宴は心温まるものであった。この間も常に若い仲間とのオシャベリが続いたことは云うまでもない。

１０月２８日　青島

青島近郊の中国五名山の一つ嶗山と道教本山、有名な青島ビール工場、刺繍工場見学。いつも若い友が一緒でオシャベリを楽しみながらの見学。一番若い姜少年が自然に最高齢の日本人に見せたやさしさは今でも目に焼きついている。

夕刻、中国共産党青島市委員会副書記で青島市世界語協会名誉理事長による招待宴が急拠持たれた。中国式の席順による中国式の宴は非常に興味深い。料理も庖丁さばきの見事さに見とれてしまった。この席で三沢会長が招待客を代表してスピーチをされた。宴終了後すぐに夜行列車で済南市へ向かう。

１０月２９日　済南

早朝、済南市着。ホテルに直行して朝食まで休憩。朝食後、地元のエスペランチストと共に黄河見学へ。黄河の雄大さにはただただ驚くばかり。黄河にかかっている近代的なつり橋の上をロバが荷車を引いて通るのが対称的で面白い。エスペラント教師の于長林氏に『北京大会参加印象記』を贈る。千仏山の山祭りということで、ホテルの横の参道は出店で賑わっていたので、祝氏に案内していただいて日本のそれととても似た光景を見物してみた。屋台での手打ちラーメンがとても美味しく思えた。

午後からは風光明眉な大明湖畔で地元エスペランチストとの交流会。「熱烈歓迎日本世界語者」の横断幕の張られた広場で歓迎のあいさつ、歌などのあと日本側も歌と炭鉱節の踊りで返礼。その後、時間までグループに分れて交歓。ここでも学習を始めたばかりの若者が多い。 Komencantinoj二人を湖畔を散策しながら励ます。別れぎわに彼女たちから思いがけないプレゼントを受けて目頭が熱くなる。夕刻からは山東省と済南市の指導者による招待宴。和歌山市が友好都市だという。ここでも中国式で、美しい山東省の料理に目をうばわれる。

１０月３０日　泰安・曲阜

バスで紅葉の美しい霊岩寺を見学して泰安市へ向かう。地元のエスペランチストの出迎えを受けて、五大名山の一つ泰山へ。残念ながら頂上までは登れなかったが、中天門站で雄大な眺めを楽しんだ。その後、孔子の故郷、曲阜へ。曲阜のホテルで師範学校でエスペラントを教えている鄒愛民

女史とひとときオシャベリを楽しみ、『北京印象記』を贈って喜ばれる。夕食後は師範大学芸術学部の学生との交流会。ここではほとんど話す機会がなく、彼らの用意した歌や器楽演奏を楽しみ、あとはダンス・パーティー。

１０月３１日　曲阜・済南

きょうはエスペランチストとの交流の計画はない。朝食のあと、孔子ゆかりの地を見学する。まず孔子一族の眠る孔林へ、そして孔廟へ。ここでは、いつもは旧暦８月２７日に行なわれる孔子祭舞楽を見ることが出来た。

午後、バスで済南市に戻る。

この旅の間、私はずっと祝明義氏の隣に席を取り、中国、日本の諸々のこと、お互いの家族のことなどを語り合うことが出来て、各地での交流だけではなく、ほとんど全行程をエスペラントで過ごすことが出来た。

済南のホテルに戻ったところ、于長林氏が待っていて、『北京印象記』の読後感を話してくれて感激した。彼は済南市でエスペラントを教えていて、日本の農民エスペランチストと文通したいと云う。いつもそう思うのだが、日本のエスペランチストとの文通を望んでいる外国のエスペランチストの何と多いことか。そしていつも私は返答に窮してしまう。私自身もう数多くの文通相手を持っていて、これ以上は手を拡げられない。友人に勧めても返事は決まって“Ｎｅ”である。筆不精というか modestaといおうか……国を挙げて国際化を叫んでいる時代に……。

夕食後、最後の訪問地・北京へ向けて出発するまでの間、于氏を交えておしゃべりを楽しみ、済南市に名残りを惜しんだ。

１１月１日　　北京

夜が白み始めたころ、北京市郊外は雪景色である。

早朝にもかかわらず、ホームには緑星旗を持った大勢の友が出迎えてくれた。その中にわが友、哈斯夫人を見つけた時の喜びは大きかった。彼女ともやはり昨年、北京で出会い、その時から文通を続けている仲である。モンゴル出身で、かつては東京第六高等女学校で学んだことがある方である。三浦市から参加された森田玲子さんが彼女の大先輩にあたることがわかり、感激の対面をされたことでも、エスペラントがどんなに素晴らしいものであるか、おわかりいただけるだろう。

この朝、瀋陽からかけつけたという、木村喜壬治さんの文通相手の超氏とも会う。彼はこのまま三沢会長と瀋陽に飛んでほしいと云う。私は札幌市民ではないし、今回は団体旅行でもあって自由行動は出来ないから次の機会に、と云うと、札幌市民でないことは重要なことではない、私たちの友人なんだからと。私はこの時、ＨＥＬ大会で瀋陽のエスペランチストを招くための募金の提案がＨＥＬの議案としてなじまないとされたことを恥ずかしく思った。これは彼、超氏だけではない。中国のエスペランチスト全体について云えることだろう。体制の違いと云えばそれは簡単なことであるが、青島、済南それぞれ日本に友好都市を持っているが、その都市以外からの私たち旅行団のために市の幹部が招待宴を持ってくれるということを、どのように説明したらＨＥＬの仲間に理解してもらえるのだろうか。

午後から毛沢東記念堂、故宮見学のあと、北京のエスペランチストとの交流学習会が持たれた。中華全国世界語協会の重要メンバーが出席したこの集会は、若い同志が用意してくれたギョーザを食べながらという、実になごやかな友情にあふれる会であった。旅行団全員に葉君健先生署名入りの“MONTARA VILAĜO”が記念に贈られ、“中国エスペランチストの文学活動”と題した講義をお聴

きした。

そこでまた超氏が現われて話したいという。今回が駄目ならぜひ次の機会には瀋陽へ来てほしいと、こちらが返事をするまで何度も繰り返す熱意には、ただただ驚くばかり。

団員全員に書も贈られる。それぞれの名前や職業、年齢にふさわしい言葉の書である。西安から来たという青年も、次は必ず西安へと誘ってくれる。外気は相当冷えていたが、心温まる集会であった。

１１月２日　　北京

この日は終日自由行動を許してもらった。哈斯夫人との約束の時間に、宿舎国賓館の門のところで、またも超氏から三沢会長と一緒に今日一日行動を共にしてほしいと云われる。瀋陽での再会を約して哈斯夫人、森田さんとバス、地下鉄を乗り継いで北京市中心部へ出る。昨年見物出来なかった北京中心街の裏通りなど、彼女がおよそ４０年ぶりで使うという日本語でおしゃべりをしながら見物。昼食は中国人専用の食堂で、熊本から北京に留学している荒木美琴さん、団員の石崎分一さんも加わってごちそうになる。わが友の戦中の日本での生活、日本から帰ってからの生活などを聞いて、中国人の心の広さをまたあらためて確認したひと時であった。

夕方からはこの旅行の中国側の受入れのお世話を世界語協会と共にして下さった中国国際旅行総社招待の北京ダックの宴会。

１１月３日　　北京

朝食にアズキガユが供されて、ここでも中国人の心温まる友情を感じて、中国を去らなければならないという想いも手伝って胸が熱くなる。

北京空港までの車中、全行程に付添ってくれた祝明義氏、青島、済南、北京でお世話下さった戴頌恩氏から請われて、彼らの別れの言葉を通訳した。北京に着いた日の午後、祝氏から、この旅行中に祝夫人が急病で入院されたことをこっそりと知らされていたので、もし彼がそのことに触れなかったら、皆に知らさなければと思っていたが、彼が淡々とした調子でそのことに触れた時、私は胸がつまってとっさに日本語にはならなかった。それほどまで私たち旅行団、いや日本人を大事に思ってくれていることを知って、みな声がなかった。これに私たちはどう応えるべきなのか。祝氏だけではない、今回の旅で出会ったすべての中国の友に対して……。瀋陽からの友すら招くことができないとは……。

この旅行中、三沢会長と、若い人たちをたくさん連れて来れなかったのが大変残念なことと何度話し合ったことか。次の機会にはもっと多くの若い人たちを誘って訪れたいと強く思っているし、瀋陽から友を招くことを実現したいとも考えている。

(1987・12・29)

EL POPOLA ĈINIOの取次ぎをしています

“El Popola Ĉinio”（中国発行の全文エスペラント月刊誌、カラーグラビア１６ページ）を取次いでいます。購読者には毎月、北京から直送されます。２月29日までにお申込みの方には絵巻物がプレゼントされます。

購読料　１年分　３０００円
　　２年分　５４００円
　　３年分　７５００円
申込み先　〒０５３　苫小牧市山手町２－１－２　北畠　瞳
振替　小樽１－３４０３４
（住所・氏名は漢字とローマ字で）

LULU Kaj KOKO

interparolo pri lingvaj problemoj(1)

KIRIKAE Hideo

Lulu: Oni diras ke lingvo estas ilo.

Koko: Iro?

Lulu: Ne, iro. Instrumento. Malgraŭ ke mi diris facilan vorton bonkore, vi kaptis erare.

Koko: Mi bedaŭras kaj dankas pro via bonkoro. Sed tio ne estas mia kulpo. Mi ne povas rekoni ĉu "r" aŭ "l" ĉiam. Sama sono al mi. Maloportune! Tio estas difekto de mia lingvo, ne mia kulpo. Sed, verdire, mi nur ripetis vian diron surprizite, ĉar vi ekparolis neatendite. Mi komprenis vin senerare tuj post kiam vi diris, "Lingvo estas ilo".*

Lulu: Jes, lingvo estas ilo, tial ĝi povas havi difektojn. Neniu ilo ekzistas plena kaj sendifekta, se ĝi estas dono de dio.

Koko: Ĉar lingvo ne estas didonaĵo, Zamenhof povis elpensi la novan.

Lulu: Vi pravas. Krei la lingvon ne estis dia faro sed homa faro. Sed "elpensi" estas iom facila vorto por esprimi meriton de lia laboro. Li ne povis elfari ĝin facile kaj per unu fojo. Necesis longa tempo. Li faris kaj uzis, kaj refaris kaj uzis. Dum la longa penado la baza formo de la lingvo malkaŝis sin. Iom post iom ĝi formiĝis en lia kapo. Kaj finfine li naskis ĝin. Post la naskiĝo ĝi kreskis per helpo de multaj samideanoj.

Koko: Mi ĵus rimarkis ke la senhara kapo de Zamenhof similas al ovo.

Lulu: Malbonmore!

Koko: Mi bedaŭras. Sed mi scias ke dank'al li ni havas ĉi tiel amuzan tempon ĝuante bonegan komunikilon. Mi multe dankas al li kaj liaj sekvantoj, kaj la vorto "elpensi" nun ŝajnas meriti pli facilan produktadon.

Lulu: Jes. Sed via ŝerco estas tre aludema. Al mi ŝajnas ke Zamenhofa kapo estis granda eksperimentejo por krei novan lingvon. Notinde estas ke li kaj liaj sekvantoj naskis kaj kreskigis la komunikilon ne "sur tablo", sed "sur kampo".

Koko: Sur kampo?

Lulu: Jes, ili uzis ĝin en vivo, en vivkampo, kaj kreskigis --- uzante kreskigis. Kontraŭe, priparolo pri la lingvo estis vana ĉiam. Priparolantoj alportis nenion dum la 100 jaroj. Nur uzantoj, perparolantoj, aldonis ion bonan al la lingvo. Ili estis veraj "nutristoj".

Koko: Ankaŭ ni estas nutristoj laŭ via diro, ĉar vi kaj mi nun interparolas en la lingvo. Cetere, ĉu vi aludis gramatikistojn per "priparolantoj pri la lingvo"? Ĉu iliaj studoj estas vanaj?

Lulu: Ne. Ja ili estas priparolantoj, kaj ili ne estas veraj nutristoj. Sed, se diri ĝuste, ili estas observantoj. Ili observas kiel samideanoj uzas la lingvon. Observado estas la sola laboro de gramatikistoj. Sed el iliaj atentemaj observoj aperis utilegaj vortaroj kaj gramatikaj verkaĵoj.

Koko: Vi intencis diri per "priparolantoj pri la lingvo" ne gramatikistojn sed kritikistojn kaj reformistojn, ĉu ne?

Lulu: Vi bone komprenas min. Sed mi intencis diri precipe reformistojn. Gramatikistoj kaj kritikistoj estas eksteruloj de nia movado. Eĉ se ili koncernas ĝin tre multe, ili estas

eksteruloj, do ignoreblaj.
Koko: Ignoreblaj?
Lulu: Jes, malatenteblaj. Tamen reformistoj ne estas eksteruloj, sed kunuloj, kaj deturuas nian movadon.
Koko: Sed ankaŭ ili estas malatenteblaj, ĉar iliaj provoj sukcesis neniam.
Lulu: Sed la provoj reaperas kaj reaperos, kaj daŭre malhelpos nian movadon. Lasu min priparoli pri ili iom.
Koko: Bonvolu. Mi aŭskultos.
Lulu: Tiu estas reformisto, kiu sentas sin pli saĝa ol kreinto. Li eltrovas difektojn en la lingvo kaj demetas ilin per pli bonaj literoj, pli bonaj vortformoj, kaj pli bonaj reguloj. Bedaŭrinde la sendifektigoj ne estas bazitaj sur spertoj. Reformisto preskaŭ ĉiam ne provas la ekpensaĵojn en reala vivkampo kaj ne atestas iliajn meritojn antaŭ publiko, nur proponas kaj asertas. Baldaŭ li ekkonas ke publiko malatentas lin, kaj ke la reformo mem ne estas tiel bona kiel ĝi ŝajnas al li unue. Tamen li neniam konfesas ke li jam forĵetis la proponon. Li nur malaperas kun ĝi antaŭ publiko. Krom tio, mi miras, ke li ofte ne publikigas la proponon en nia lingvo. Ja li ne kontentiĝas per ĝi. Sed li ne proponas eĉ en lia sendifekta lingvo sed en lia patra lingvo. Ĉiuj nun scias, ke li nur amas palpi, priparoli, kaj reformi la lingvon. Ĝi estas lia ludilo, kaj reformo estas lia gustaĵo. Li pensas ke artefarita lingvo donas ŝancon al li amuzi sin per reforma ludo. Li akceptas la lingvon volonte, ĉar li ne renkontis tian ŝancon en nacia lingvo (kvankam li povas kontentigi la guston iom en la ortografia problemo de la patra lingvo). Sed kiam la ludo tedas lin, jam ne necesas resti en nia mondo. Cetere, lingva fenomeno estas multe malsimpla. Malsagulo ne havas kvaliton palpi ĝin. Li ne konas ke la pioniroj jam pripensis pri preskaŭ ĉiujn supozeblajn reformoproponojn. Ili prudente malakceptis tiujn sur la riĉaj konoj kaj spertoj.
Koko: Mi konsentas, kaj mi min certigas pri via opinio, ĉar mi scias ke en la 100-jara historio de nia lingvo aperis kaj malaperis multe da samaj aŭ preskaŭ samaj reformoproponoj. Reformista ideo ne transpasis iun difinan limon. Sed vi tro malkaŝe parolis --- malsaĝulo ne havas kvaliton palpi ĝin!

(iam daŭrigota)

* Koko forte dubas, ĉu povas okazi reale ke "Deledito japana longe traktis iun temon, sed neniu sciis, precize kiun, ĉar li konstante miksis la voĉojn ro kaj lo." (Istvan Nemere, la Blinda Birdo, Hungara Esperanto-Asocio, Budapeŝto, 1983, p.9).

Ŝi (Koko) intime konas kelkajn maljunajn aininojn, kiuj ne povas distingi la japanajn sonojn p kaj b, t kaj d, k kaj g, s kaj z. Malgraŭ tio ŝi interparolas kun ili sen erarkompreno en la japana-lingvo.

En la aina konsonanto-sistemo ne ekzistas voĉ-kontraŭ-senvoĉa kontraŭstaro. Frikativoj estas limigitaj en palaton. Precipe, la aininoj ne povas distingi c kaj ĉ kaj s kaj ŝ. Krome, same kiel en la japana lingvo, ne ekzistas la distingo inter r kaj l. Pri vokaloj kaj duonvokaloj la lingvo estas same kiel Esperanto. Entute la dekdu literoj el Esperanto, b, f, v, d, z, l, ŝ, ĵ, ĉ, ĝ, g, kaj ĥ, ne necesas por transskribi la ainajn sonojn. La mirinde simpla sonsistemo! La nombro de la konsonantoj de la aina lingvo estas malpli multa ol duono de tiu de Esperanto (vidu Tabelo 1).

Estus neimageble malfacile por ainoj lerni la korektan elparoladon de Esperanto. Sed tamen oni komprenus ilian Esperanton tiel bone kiel Koko komprenas la aininojn en la japana lingvo. Se iu el esperantistoj ne povus kompreni ilian Esperanton, estus klare ke ĉe li ne sufiĉas esperanta kapablo.

Tabelo 1. Komparo inter la sonsistemoj de la aina lingvo kaj Esperanto

la aina lingvo	Esperanto
i u	i u
e o	e o
a	a
p t k	p t k
	b d g
s h	f s ŝ ĥ h
	v z ĵ
c	c ĉ
	ĝ
r	r
	l
m n	m n
j ŭ	j ŭ

８７年のZ祭のため Kamĉatka の Grupoに出してあった mesaĝo の返事間に合わず、正月に着きましたので紹介します。 （星田 淳）

Karaj japanaj gesamideanoj, geesperantistoj, de nia najbara insulo Hokkajdo! Sinceran saluton okaze de la memortago de Ludoviko Zamenhof en la 101-a jaro de Esperanto! Plimultiĝon al e-istaro, sukcesegojn al E-movado, al nia agado en niaj landoj per Esperanto por interkompreno, paco, amikeco! Tion volis L.Zamenhof kaj ni! Sukcesojn al vi en ĉio en la Nova Jaro!

urbo Petropavlovsk-Kamĉatskij,SU,
dum Z-Festo, la 20-an de dec.1987
Andris Natinj

「平和の波」について

苫小牧　星田 淳

１１月の Heroldoに岩井さんの記事があり、読みました。苫小牧でもあの日同様な行動があり、その一つとして、いろいろな言葉の文書をびんに入れて海に流しました。エスペラントではどうかと尋ねられ、Ondoj de Paco と紙に書いて渡したので、今この言葉がどこかの海をめぐっていることでしょう。ただ一発で終わるものと思わなかったため複数にしましたが、Kamĉatkaからの手紙では単数でした（Ondo de Paco）。

Petropavlovsk-kamĉatskijでも同じ日の集会に Esperantistoj は横断幕を掲げて参加し、 S-ro Andris Natinj(私のkorespondanto)は演壇に上って、Esp.百年のこと、Zamenhofのこと、 E-istoj の平和と相互理解のための努力について話した、と写真を添えて書いてきました。

＊「平和の波」行動は”87原水爆禁止世界大会で米ソ代表が共同提案した、核兵器廃絶をもとめる国際的統一行動。この「波」は、国連軍縮週間初日の１０月２４日正午、広島・長崎を起点に時差にあわせて地球をひとまわりした。 （編集部）

Petropavlovsk-kamĉatskijの「平和の波」集会であいさつする S-ro A.Natinj。星田氏提供。

邦文縦書き、左から右への提唱

札幌　菱　浩

「エスペラント連盟の機関誌に邦文云々を持ち出すのは筋違いも甚だしい」とのご不審を抱かれることは万々承知致しておりますが「言語の問題であれば結構」との編集部のお言葉により投稿させて頂きました。

一介の事務屋として多少文字に関心がある程度の者であり、難しい学問的なものではなく、単なる形式的なものです。

ご承知の通り日本の文化は混合文化とも言われるもので（大和民族は純粋であるから優秀であると虚勢を張った、どなたかもおりましたが）、その象徴である文字も漢字を中国から輸入？　してそれを基準に「ひらかな」とその上「カタカナ」という便利なものを考案し、今日に至っており、縦書き（以下印刷をも含めます）を原則とし、行を変える時は右から左へ　←　へと進めておりますが、仮名文字は別として漢字の筆順の最後は殆んど　→　・　↘　・　↓　になっておりますので行を変える時は従来と逆に左から右へ　→　と進めるのが合理的であると考えられます。この方法を用いる場合の利点は上記のほかに、

① 人は殆んどが右利き（左利きが重用されるのは野球の選手か、時による打者位のもので、捕手には未だかつて見聞したことはありません）であれば書いたあとが手の陰になりません。

② 文字を書いたり、読んだりする時は視線（目線）は左から右へ、幾分でも和・洋接近する。

③ 蔵書の整理は表紙が横印刷のものと揃い、好都合です。

そのような面倒なことをするなら一層のこと邦文も横書きに統一した方がよいのではないか（これからは機械化の時代であり、文章を書く時世は終わり、筆順云々するのは時代錯誤である、とのそしりを免れぬかもしれませんが）とのご意見もありましょう。しかし、いわゆる自然科学系統のものや、実務書等は別として、文芸もの（小説・詩歌）は横書きでは日本独特のせん細な感情を出せないのではないでしょうか？　このように思うのは大正生れ（１９１８年）の遅れた考えかもしれません。私は「下手の横好き」で川柳を少々作句しておりますが、句帳は勿論、縦書きで左から右へ記録しております。横書きでは川柳ですら、日本独特の味は出せないような気がします。

ご関心をお持ちの方は一度、以上の方法で書いてみて頂けませんか。馴れますと実に合理的なことが判ります。冒頭に述べました通り、直接エスペラントと関係ありませんので、ご意見のある方は私宛に頂ければ幸甚と存じます。

〒062 札幌市豊平区豊平４条３丁目3-36
☎011-831-9027　菱　浩（ひし　ひろし）

編集部から

連盟を構成する最大の地方会である札幌エス会が今年の日本大会を招致した。

本道で日本大会を開催する件についての連盟の見解は、本号の「役員会報告」のとおりである。札幌エス会と大会準備委員会にたいして「精神的には後援する」という立場で、今後、本誌は必要なかぎり大会関係の記事を掲載してゆく。

宮井康夫、小林貴美子両編集委員の大会準備委員会転出に伴い、あらたに河原一弥、馬場恵美子が編集部員として実務にあたることになった。　（高橋）

―「北海道新聞」１２月２３日付夕刊から転載 ―

メモリー MEMORY

ポーランド

会社員　馬場恵美子さん（28）
＝札幌市北区新琴似

―意義深かったエスペラント大会―

七月下旬から八日間、ポーランドのワルシャワでエスペラント世界大会が開かれました。世界共通語のエスペラント語がこの国で誕生して、今年でちょうど百年。大会には六十カ国から六千人、日本からは三百人が参加しました。

会場となったのは市の中心部にそびえ立つ文化科学宮殿。これはスターリンの贈り物です。期間中はコンサート、分科会、遠足と行事が盛りだくさん。辞書を片手に話しだすと、初対面の人でも家族のように親しみをもてました。道内から参加したのは十二人。写真はそろいの浴衣姿で集まったところです（私は立っている右から三番目）。HOKKAIDO SAPPOROと白く染め抜いた浴衣は、とても目立ちました。

ワルシャワは新しい街です。大戦で市内はほとんど打ち壊されたので、いまの建築物は歴史を感じさせません。ところが、旧市街へ足を踏み込むと光景は一変します。広場を中心とした小路、石畳、美しい教会、色とりどりのタイルの家…。壊される前の写真や絵をもとに造ったというのです。自分のふるさとを守る執念を感ぜずにはおれませんでした。

ユダヤ人収容所も訪ねました。「平和の意味を考え直す」―ポーランドはそれを教えてくれました。

よく使われる　単語・ことば（２）

（引例：新選和エス，新選エス和，日エス，その他）

ペラペラ	あいつはエスペラントがペラペラだ Li flue parolas en esperanto. ペラペラの人絹物 maldika malforta rajonaĵo.
ベラベラ	ベラベラしゃべる senbride parolaĉi.
喋　る	babili. 喋りちらす disbabili. お前はよく喋る奴だ Vi estas tro babilema.
ときどき	時々 de tempo al tempo. しばしば ofte. 時たま iufoje;foje;kelkfoje.
た　ま	偶，稀 malofte;neofte. たまの休みを利用して profitante neoftan libertempon. 彼はたまにやって来る Li venas tre malofte. 彼はたまににしか来ない Li venas ne ofte.

（高橋要一）

SALATO

★いつもご連絡ありがとうございます。末の娘（4カ月）がもう少し大きくならないと、なかなか出席できません。盛会をお祈りしています。（札幌・留目雅幸・昌子）

★名簿に氏名をのせる際、カタカナで表記してください。（札幌・カワハラ・カズヤ）

★お世話かけてすみません。年をとったので遠慮します。（札幌・浜中　稔）　<そんな悲しいこと言わないで！　編集者>

★ご盛会を祈ります。（千歳・中里　和夫）

★ Mi petas pardonon pri tio ke mi ne povas partopreni en la festo pro mia malbonsano.（札幌・椿　陽考）

★ Zamenhofa Tagoは別名Tago de libro 。（Z.のでなくとも）Esp.の本を買い読む日。この1年に読んだ本の紹介などどうでしょう。私も考えます。歌や詩の紹介も従来のように、やりたいものですね。（苫小牧・星田　淳・文子）

★仕事の都合で土曜日になかなか時間がとれません。皆様に御迷惑をおかけし申し訳ございません。機会があれば、またぜひおうかがいしたいと思います。（札幌・三橋　靖子）

★Z祭のお誘いありがとうございます。札幌でのZ祭は今迄出席した記憶がありません。冬になって暗く、教会なので行きにくいです。とりわけ今年は、D-ro YAMAGA とのZ祭が思い出され、辛い気がします。みなさんによろしく。（小樽・山本昭二郎）

＊　　＊

★札幌エスペラント会のザメンホフ祭出欠確認のハガキから紹介させて頂きました。北海道大会のときもそうですが、返信ハガキのひと言が記事になることがあります。また、消息を知る上で楽しみにしている方もいらっしゃるようです。

★ともするとどうしても札幌周辺にかたよりがちになるHeroldo de HELですが、こういったかたちで近況を報告されるのも大歓迎です。“なかなかチャンスがなくて”、“元気でやってます”、“雑誌にこんな記事がありました”などなど、たくさんの御利用をお待ちしています。

★このページの名前はSALATO。“サラダ”転じて“ごちゃまぜ”の意味です。Mikspotoよりちょっぴり上品だな、と思いませんか。　（馬場）

Kion vi faros okaze de nuklea akcidento?
Kisu viajn infanojn adiaŭe!
Nepermesu Atomcentralon en Hokkaido!
La Loĝantkonferenco Tut-Hokkaida Kontraŭ Nuklearmila Kontraŭ Atomcentrala (civilmovada organizo en Hokkaido) eldonis la kalendaron de Bikki SUNAZAWA, kiu estas fama aina artisto. En ĝi oni uzas esperantajn vortojn. Organizaj membroj esperas ke pacamaj esperantistoj aĉetu la kalendaron kaj kunmovadu kontraŭ atomcentralo kun ili.

"Pirka Mosir"
(aina lingvo: Bela Tero en Esperanto)

La kalendaro kun ksilografaĵo de B.SUNAZAWA: B2×2: kotizo 1,000 enoj: kaj sendkosto

反核・反原発全道住民会議が企画製作した砂沢ビッキ木版画カレンダー。B2判、2枚一組。　問い合わせ先：宮沢　直人　〒001 札幌市北区麻生町1-3-13　☎011-717-4189